

安部公房とフリオ・コルタサルの比較研究

——〈アイデンティティ喪失〉の隠喩——

オルネド・ルシア

指導教員 大野 英二郎

安部公房とフリオ・コルタサルは二人を隔てる地理・文化的な距離にもかかわらず、文学的な概念や好奇心を共有していた。そして世界に影響を与え、現実に対する考え方や感じ方を変化させた様々な政治的・社会的・芸術的事件が起きた同じ時代を二人は共に体験した。彼らが作品で表現した人間の存在と葛藤の中からは〈アイデンティティ〉の主題が際立ち、長編や短編において様々な技法を用いてこのとりわけ人間的な問題について考察した。

本論はそれらの中から、特に〈変身〉というテーマに注目した。なぜなら変身が内包する心理的・哲学的・芸術的問題を把握することによって、現象を超えた存在の広がりや意味を、深く読み取ることができるからである。つまり二人の作家が変身を扱う方法を比較検討することによって、どのように彼らが人間存在の根源的問題を考えていたかを明らかにすることができる。それゆえ本論では、彼らが変身をどのように表現し、それによって何を伝えようとし、何を考えたのかを観察した。彼らの視点の間に橋をかければ、我々の時代にも影響を与えてつづけている、この時代をより深く理解できるのではないだろうか。そのために本論では比較文学の視点から安部とコルタサルの変身物語を考えた。すなわち文学理論、社会や歴史の状況を踏まえ、言語の分析を通じて、安部とコルタサルの作品を分析し、その解釈を考察した。

序論で二人の作家の伝記的事実を簡潔に振り返った後、続く本論は主に三つの段階をたどって、展開した。まず第二部では〈新幻想文学〉というジャンルの理論を考察して、本論で扱う作品をそのジャンルに位置づけた。〈新幻想文学〉は二十世紀における〈幻想文学〉の進化であった。〈幻想〉のジャンルも時代の新たな理論や概念に応じて、それまでの論理や理性に支配された考えから離れ、新しい現実の探索という事業に入っていった。新しい〈幻想〉は、ハイパーリアリズムへの反応であり、再び超自然への扉を開いたが、その主たる舞台となったのは我々の現実の世界であった。この新幻想文学のジャンルをもっと具体的に説明するならば、様々な論者によって指摘されている三つの特徴をあげることができる。第一に、作品は現実の世界の環境で展開する。第二は、その〈現実的〉な環境に超自然な存在が侵入する。つまり自然法則が律すると考えられる我々の日常的な世界に、急にその世界に属しないものが現れる。第三の特徴は合理的な説明が不在することである。つまり、物語は開かれたままに終わってしまう。このジャンルの特徴は、単なる文学的形式としてだけではなく、作家が持っていた現実の概念をも反映する。それは安部とコルタサルが共通していた考え方で、現実とは日常的に体験している世界だけではなく、その〈向こう〉に〈他者性〉が存在しているという世界像であった。二人の作家は幻想的な作品を使用し、その向こうの可能な世界を探検する目的を持っていた。

次に第三部では、文学の歴史的伝統の中で、変身のテーマがどのように扱われてきたのかを観察して、変身における安部とコルタサルの独自性を照らし出した。二人が文学の伝統を受け継いでいるのは明らかで、実際に古典作品を直接に引用する場合も存在する。しかし彼らの作品における変身とは、ほかならぬ現代に位置していて、それに伴う歴史的、社会的、思考的な特性を含む。古典古代においては変身が現実の原因や現象を説明する試みであったことは異なり、安部とコルタサルの場合、変身から教育的な意図を排除する。彼らにとって、変身とは現実を〈説明〉する方法ではなく、むしろ現実を〈探検〉する方法である。彼らの作品のもう一つの特徴は、変身という現象が一般的な人間である登場人物の日

常的な世界に侵入することである。この特徴があるからこそ、読者は登場人物と自分を同一視できる。神話が物語る神々の蒼らす天界や説話の遠い自然と違い、このような舞台設定は読者にとって非常に身近に感じられる。変身は都市にある我々の家に侵入するのである。

第三部ではあわせて、安部とコルタサルが変身物語で語るアイデンティティの問題を紹介した。二人が生きた二十世紀はアイデンティティ危機の世紀であるともいえる。戦後は道徳的価値観や伝統的価値観を問い直す時代であった。その後、ある程度の安定に至って、発展へと向かっても、世界は平穏になるどころか、目がくらむほどの速さで際限のない成長が始まり、人間の命さえなおざりにされてしまうようになった。このような状況が、人々の気持ち、現実の解釈方法、精神などに深い影響を及ぼしたことは明らかだろう。二人の作家の人生においても葛藤的なエピソードがあった。満州で育った安部とヨーロッパへ移民したコルタサルは、いずれも異国にあって自意識が二重化する。さらに若い頃に身近な人の死を二人とも体験し、そこから強い印象を受ける。また戦中や戦後の厳しい状況も、彼らの精神に深く刻まれる。

このような不安定な状況では自分のことを知り、自己を造ることは不可能であろうか。心理学者にとってはまだ可能性は残されている。その一つの例は芸術活動である。実は安部が書き始めたきっかけは幼なじみの死であった。コルタサルの場合はエドガー・アラン・ポーから受けた印象のためであった。ちなみに安部もポーに深く心酔し、賞賛してやまなかった。安部とコルタサルは、それぞれが体験した内的な断絶や葛藤的な経験によって人間の本質について自問することに導かれ、アイデンティティの危機を多くの作品のテーマとした。上で述べたように人間性やアイデンティティ問題を巡る思考は彼らの長編や短編に繰り返して出てくる。安部の作品の登場人物は窒息するような限界的状況に絡み、アイデンティティが動揺する。『他人の顔』(1964)、『人間そっくり』(1967)、『箱男』(1973)、『密会』(1977)などの長編では登場人物が、身の安全やアイデンティティを脅かす危うい状況にある。コルタサルの場合、最も有名な『石蹴り遊び』(1963)という巨大な長編やその三年前に執筆された『賞たち』(1960)という長編では登場人物のアイデンティティについて読者に深く考えさせる。しかし実存的な問題は、長編だけではなく、様々な文体や舞台の短編を通じて、二重化する人、超自然な存在を感じる人、別の時間帯や遠い次元で存在する人と繋がっている人達のストーリーにも現れている。

二人の作家とも長編と比べると、短編においての方が、〈新幻想的〉な舞台を使用して他者への探検やアイデンティティ問題を提起する傾向があるといえる。その戦略を通じて確実に安定した日常的な現実を問いかけるのである。つまり新幻想的な装置はその向こうの存在への架け橋だけではなく、慣用的な方法では接近できない、分裂している自己を探検させる道でもあるので、人間の最も深くにある存在への架け橋でもある。この意味で、安部もコルタサルもこのテーマを扱う作品において〈変身〉を使用したことは非常に興味深い。

そして第四部では、変身をテーマとする二人の作品が共有する要素を分析することによって、アイデンティティ喪失の問題を考察した。それは〈内面の空虚〉、〈二重性と両義性〉、〈内側から生じる存在〉、〈人間性の減少と喪失〉と〈言葉から生じる新たな可能性〉の五つの要素である。これらの要素を踏まえると、〈変身〉が〈アイデンティティ喪失〉の隠喩として使用されているという解釈が導かれる。

まず〈内面の空虚〉とは、変身する前の登場人物が共通して空虚の感覚を抱いているということである。作品を分析すると、その物理的・精神的空虚の感覚が、より根源的な空虚と繋がっていることがわかる。登場人物が変身へと導かれるのは空虚の感覚からであり、その感覚はアイデンティティの空虚を反映している。安部とコルタサルのそれぞれの短編では、空虚の感覚は様々な状況の結果として示される。登場人物の感じる空虚が読者に推測される場合もあるが、明らかに言及されている場合もある。例えば安部の『S・カルマ氏の犯罪』の主人公のS・カルマの胸は本当に〈からっぽ〉である。しかしコルタサルの『転居』の仕事に捧げた全生涯のライムンドが覚える感情も空虚にほかなるまい。本論で分析する作品のグループでは、登場人物がシステムの一員になれず、人間性が疎外され、自分の中には何

もない、空虚であると感じるのである。それゆえ彼らは別のものに変身する。名前を失うS・カルマのように、彼らは皆、存在理由つまりアイデンティティを失い、繭、水、棒、別の人等になってしまう。

〈二重性と両義性〉とは、〈内・外〉、〈表・裏〉、〈右・左〉等の表象によって物質的に表現された登場人物の二重性を指す。例えば安部の「デンドロカカリヤ」のコモンは植物になる前に幾つかの発作に苦しむが、そのとき顔は裏返しになって、内と外が逆転する。そしてコルタサルの「誰も悪くはない」ではセーターを着ようとする登場人物の右手が彼の意図に従わないし、攻撃される爪になり、結局語り手の行為は不可能になる。ほとんどの作品では二重的な葛藤が解決されないまま、登場人物が変身してしまう。これらの物語に表現されている二重性あるいは両義性は、分裂しているアイデンティティを持つ登場人物の内的な葛藤の表徴であると考えられる。それぞれの作品では、対立する力の戦いが展開し、すべての場合、もう一方の側が勝利する。従って登場人物は最初のアイデンティティを失うことになる。そこに提示される二つの要素は補い合っているが、同時に和解できない。これらの作品は、人間と、それに対立する変身した人間でないものという両義性にまとめられる。いいかえれば登場人物は葛藤している二つの部分を調和できないため、平衡を失ったアイデンティティを持つ人物になってしまう。

他方、登場人物を変身へ駆り立てるのは、人物自身の内面に由来する力である。つまり、〈内側から生じる存在〉によって人間性を奪われる。安部とコルタサルの作品において、葛藤する二つのアイデンティティは同じ一人の人間から出現する。外の行為者の働き掛けによる古典的な変身（ある神が別の神を動物や植物に変化させる）と違い、この二人の作家の作品における変身を動かすものは、人物自身の中から由来する。その存在が明示的に記される場合もある。例えば安部の「デンドロカカリヤ」のコモンの《心の中で何か植物みたいなものが生えてくる》と覚える。そしてコルタサルの「ウーパールーパー」では、登場人物が感じる内側の存在が人間と、その人間が変身する動物との繋がりとして表現される。「ウーパールーパー」の語り手は初めて出会う時からこの動物と親密に繋がっていると感じる。安部とコルタサルの変身物語で現れるこのような内側の存在は、もう一つの自分の表現であると考えられることができる。しかしその別の自分はアイデンティティを豊かにする捕捉的な要素であるどころか、アイデンティティに対して否定的な存在である。それが、人間自身の最も深い所から現れ、その人間本来のアイデンティティを奪うからである。

本論で観察した短編では、変身する登場人物は、それぞれに異なる程度で〈人間性を減少・喪失〉する。人間性の喪失が部分的な場合もあるが、完全に喪失する場合もある。例えばコルタサルの「大きくなる手」と「誰も悪くはない」では登場人物の手だけ変身し、それを表現するために、コルタサルは動物や機械を意味する名詞を使用する。そして安部の「バベルの塔の狸」のKアンテンは透明になるが、目だけがそのまま残る。完全に変身するのは、例えば壁になる安部の「S・カルマ氏の犯罪」と「魔法のチョーク」の主人公やコルタサルの「ウーパールーパー」でその動物になる男性である。上に分析した短編では登場人物が変身すると、人間としてのアイデンティティも喪失する。外見のみの変化ではなく、人間特有の能力も失う。とりわけ変身がもたらすコミュニケーション能力の喪失は、〈変身〉が〈アイデンティティ喪失の隠喩〉として使用されているとする解釈へ導くキー・ポイントとなる。

最後に安部とコルタサルの個性的な言葉遣いという要素に注目した。二人の作家は、それぞれの変身物語において、戦略としてアナグラムや慣用句、言葉遊びを使用している。もっとも明らかな例はコルタサルの「遠い女」である。登場人物の名前を構成する文字から不思議な道が開ける。自分の名前の綴りの順番を変えると、《(Alina Reyes) だと、es la Reina y… (彼女は女王様、そして……)》に変化する。この女王様でない女は、後にブダペストに住んでいる《女乞食》であると分かる。この他者の存在は主人公アリーナを混乱させ、彼女は《乞食》と出会うために、新婚旅行でブダペストへ行くことにする。そして二人は抱き合った瞬間に、互いの体を交換する。安部も単語の重層的な意味を使用する〈語り〉の戦略を活かす。しかし彼の短編の場合は、ある表現を構成する単語がもつ隠喩的な意味を捨てて、文字どおりの意味として使用することによって、現実とはさらに異なる姿の提示が可能になる。例えば「詩

人の生涯」では《私は〈綿〉のように疲れて》いる女の人は〈糸〉になってしまう。糸車を踏み続けているこの女性の場合は、疲れを示すために、この表現を使うことは特別な含蓄を持っていた。これらの戦略によって、上に述べた安部とコルタサルによる〈他者性〉の探検が〈単語〉の次元までに及んでいることが明らかになる。二人にとっては、単語自身がその他の存在への扉である。つまり彼らの作品は、単語によって新しい幻想的な現実を創造するのではなく、単語を通じて他者の現実へアクセスするのである。このような言葉遊びがシュールリアリズムにおいても特別な意義を持っていたことは、時代との関連を考える上で重要な意味を持つ。安部とコルタサルは単語に潜在している意味や抑圧されている意味を取り出すことに秀でていた。そして彼らの作品にはシュールリアリズムへの言及も多く、「遠い女」も「詩人の生涯」にもダリの名前が出てくる。象徴の中に象徴を隠していたダリの言及は偶然ではないであろう。この点を敷衍すると、安部とコルタサルは言葉遊びを活用するが、彼らの場合には、それが喪失や破棄に終わる遊びであるといえる。

このように安部とコルタサルの作品では〈アイデンティティ問題〉が重要なテーマを形成する。彼らはそれぞれの生涯にかけて、様々な手法を駆使して、この問題に取り組んだが、本論で〈変身〉に焦点を当てた。〈変身〉において彼らの間には相違点も存在する。安部の場合、変身物語は彼の初期作品に限られたテーマであったことに対して、コルタサルはより長い時期にわたって変身のテーマを扱った。言葉遣いに関しても上に述べたように、二人の文章にはシュールリアリズムからの影響は明らかであるが、安部とコルタサルの文体は、それぞれの個性があり、全く異なる部分もある。安部の文体は直接的で、描写は特に効果的である。また安部の作品には非常に人間的要素が色濃くなって、それはスカトロジーや淫らな描写なども含む。一方、コルタサルは審美的観点からより好ましい効果を追求し、彼の作品はとりわけ詩的である。

しかし二人の軌跡の交錯する点に、変身が位置していた。本論で取り上げた短編は現代人が体験する内側空虚について考えさせる挑発である。二人は内面の葛藤を解決できないという問題の最も悲劇的な結果を探検する。それは現代人が向かう不可避な喪失である。登場人物は変身すると、自分ではないが、しかし自分の内面から生じた他者のアイデンティティの下に居るしかない。変身は〈喪失の事態〉の認識に他ならない。

[参考文献]

分析対象の短編

安部公房の短編

- 「家」『安部公房全集 第七巻』新潮社、2009年、388-401頁
- 「赤い繭」『安部公房全集 第二巻』新潮社、2009年、492-494頁
- 「洪水」『安部公房全集 第二巻』、新潮社、2009年、495-498頁
- 「詩人の生涯」『安部公房全集 第三巻』、新潮社、2009年、74-83頁
- 「デンドロカカリヤ」『安部公房全集 第二巻』、新潮社、2009年、234-254頁
- 「S・カルマ氏の犯罪」『壁』新潮社、2013年、11-144頁
- 「バベルの塔の狸」『壁』新潮社、2013年、145-218頁
- 「棒」『安部公房全集 第五巻』、新潮社、2009年、231-235頁
- 「魔法のチョーク」『安部公房全集 第二巻』、新潮社、2009年、499-509頁

フリオ・コルタサルの短編

- 「占拠された家」(Casa tomada) 内田吉彦訳『アルゼンチン短編集』国書刊行会、1990年、99-109頁

- 「大きくなる手」(Las manos que crecen) 寺尾隆吉訳『対岸』水声社、2014年、22-33頁
- 「転居」(Mudanza) 寺尾隆吉訳『対岸』水声社、2014年、91-104頁
- 「遠い女」(Lejana) 入谷芳孝、木村榮一訳『遠い女 ラテンアメリカ短編集』国書刊行会、1996年、75-92頁
- 「山椒魚」(Axolotl) 木村榮一訳『いのちのこたち』筑摩書房、1995年、78-88頁
- 「誰も悪くはない」(No se culpe a nadie) 木村榮一訳『遊戯の終り』国書刊行会、1977年、11-15頁
- 「黄色い花」(Una flor amarilla) 木村榮一訳『遊戯の終り』国書刊行会、1977年、81-90頁
- ・安部公房「カフカの生命」(1980)『安部公房全集 第二十七巻』新潮社、2009年、59-66頁
 - ・安部公房『砂漠の思想』講談社文芸文庫、1995年
 - ・安部公房「私の小説観」(1954)『安部公房全集 第四巻』新潮社、2009年、282-284頁
 - ・安部ねり『安部公房The Biography of Kobo Abe』新潮社、2011年
 - ・石川淳「序」『壁』新潮社、2013年、5-8頁
 - ・高野斗志美「安部公房のキー・ワード」『作家の世界・安部公房』、vol. 番町書店、1978年、239-280頁
 - ・寺尾隆吉「訳者あとがき」『対岸』水声社、2014年、169-179頁
 - ・トドロフ・ツヴェタン (三好郁郎訳)『幻想文学論序説』東京創元社、1970年
 - ・本多秋五「変貌の作家安部公房」『作家の世界・安部公房』、vol. 番町書店、1978年、55-70頁
 - ・柳田國男「狸とデモのロジー」『妖怪』河出書房新社、2000年、245-252頁
 - ・Alazraki, Jaime, *En busca del unicornio: los cuentos de Julio Cortázar. Elementos para una poética de lo neofantástico*, Madrid: Gredos, 1983.
 - ・Bassnett, Susan “¿Qué significa literatura comparada hoy?”, in *Orientaciones en literatura comparada*, Madrid: Arco Libros, 1998, pp. 87-101
 - ・Bozzetto, Roger, “¿Un discurso de lo fantástico?”, in *Teorías de lo fantástico*, Madrid: Arco Libros, 2001, pp. 223-242.
 - ・Cortázar, Julio *Cartas 1937-1954*, Buenos Aires: Alfaguara, 2012.
 - ・Cortázar, Julio *Clases de literatura, Berkeley, 1980*, Madrid: Alfaguara, 2013.
 - ・Frosh, Stephen, *Identity Crisis. Modernity, Psychoanalysis and the Self*, London: Macmillan, 1991.
 - ・Herráez, Miguel, *Julio Cortázar, una biografía revisada*, Barcelona: Alrevés, 2011.
 - ・Iida, Yumiko, *Rethinking Identity in Modern Japan*, London: Routledge, 2002.
 - ・López López, Matías, “Mito y filosofía en las Metamorfosis de Ovidio: Ulises, Hércules, Niobe, Licación”, in *Cuadernos de Filología Clásica*, Madrid: Universidad Complutense, Vol. 22, 1989, pp. 167-174.
 - ・Zambrano, Gregory, “¿Inmortalidad o repetición? El mito revisitado en “Una flor amarilla”, de Julio Cortázar” in *Contexto Segunda etapa Vol. 18 No. 20*, 2014, pp. 131-168.